
音響機器等を利用した音声教材の試作

小松 雅彦／松村 文芳

研究代表者の小松が在外研究のため、松村が中心となって報告する。松村は中国語学科の学生に開講している「中国語演習Ⅱc (リスニング)」を5年間担当している。北京語言大学出版社の『初級漢語聴力2』を使用してテキスト付属の音声 wave ファイルに変換して、言語研究センターの AdiLL-1000 のシステムで学生に学習させている。学生はヘッドホーンで音声を聞いてすぐに問題に回答するので授業時間が有効に使える。リスニングといっても意味がむずかしいので意味説明に時間がかかるのが難点である。最近このシステムで流れるきれいな音声と文の意味の関連を明示すれば学習者はより効率的に中国語を習得できるのではないかと考えるようになった。そこで市販されている音声処理ソフトを使用して教材中のいくつかの文をとりこみ、波形の分析を行った。その結果、前置詞の「把」、「連」、「被」等の波形の振幅が大きいに気づいた。前置詞はその直後に来る名詞句に比して振幅が小さいと思っていたが、結果は予想を裏切った。そこでこれらの文の意味を考え、それを論理式で表記してみると、それらの前置詞は論理式の最も外側の関数(述語)になる、つまり母型文の述語になっていることが明らかになった。今後はこれらの前置詞の発音に注目

して教える必要があることを認識した。また波形では振幅の小さい弱い音節も意味上は重要な役割をしているので、音声と意味のつながりは今後多面的な視点が欠かせないことが明らかになっている。小松の在外研究の終了を待って英語音声研究とのすりあわせを検討したい。

小松は、英語のリスニングやディクテーションの教材として使用できそうなものとして、幼児向けアニメのDVDを検討している。リーディング学習では、精読に対して辞書を引かずにどんどん読む多読という方法が提唱されているが、リスニングの場合は、リアルタイムで音声が出てきてしまうので、そもそも辞書を使わずに速く理解するしかない。その点、幼児向けアニメは、内容が分かり易く、知らない単語があっても映像を見れば意味が分かる。上の年齢の子供向けのものに比べて、発音もはっきりしているように感じられる。また、最近公開された調音や発声の動画教材についての調査検討を行っている。いずれも、体の外からは直接見ることでできない器官の映像を体系的に編集したものであり、貴重な映像を多く含んでいる。これらの授業内での活用方法を検討している。